

平成 29 年度作文コンクール

安全振興会では、生徒の皆さんの安全意識の高揚を図るために、「安全」又は「健康」をテーマに作文コンクールを実施しています。今年度も素晴らしい作品が1,025編も寄せられました。桐野輝久委員長、萬俣好明副委員長、宮代哲彦、萩元幸治、井上譲、高梨智委員の6人の元校長先生に審査をお願いしました。最終選考会議では、最優秀2編、優秀5編、佳作35編が決定されました。この中から最優秀に選考された作品を掲載しました。

最優秀賞

「日常」をリハビリする

県立瀬谷高等学校 三年

石井 航大

「お前もやってみろ」と、少々荒っぽく声をかけてきたのは、元板前の老人だった。ちよと箸を使った奇妙な作業中にわたしは横浜市にある病院のリハビリ室に足を踏み入れていた。理学療法士の両親が、ある病院の紹介者を通じて、わたしに病院見学を勧めたのだ。作業療法士の職業に漠然とした関心を抱いていたわたしにとって、それは思わぬ形で実現することになった。入り口の自動ドアを抜けて待合室がある。その床に貼られたカラフルなテープは、患者が迷わないように病院内を少し大げさに誘導している。わたしもこのテープに案内され一室に入った。元板前の老人は豆を模して人工的な材質でつくられたものを箸を使ってつかみ取る地味な作業をくり返している。「自励」と呼ばれるその箸は、トンダのような形をしていて、リハビリ専用で作られている。声をかけてきたのはそのときだった。いつの間にか、老人にリハビリを見計らっていた作業療法士は消えている。老人はどうやらこのタイムングのつもりでいたかのようだ。この単純に見える作業に飽きていたのかも知れない。老人が手渡してきたものは、「自励」ではなくごく普通の箸だった。スムーズに作業を進めるわたしの本音は、やわらかく老人の話に乗る、そんな時間として受け止めていた。「箸の使い方が違うな」という言葉の背後には、老人の「ある期待」のようなものを感じる。一本だけの箸のみを動かすのではなく、二本の箸を同時に動かすのが正しい、と老人は言う。いわゆる、「ある期待」の中心がはじめて理解できると感じたこと、老人の「ある期待」の中心がはじめて理解できると感じたこと、老人の「ある期待」の中心がはじめて理解できると感じたこと。その直後に一言、「俺はもう麻痺のせいではできないんだ。老人は麻痺した片腕をわたしに見せて笑った。正直、これにはなんと返したらいいかわからない。その乾いた笑みは、どこか不自由になった身体の不思議さを面白がっているようにも見える。「患者のやりたいことをやらせてあげることが治療になる。」わたしを案内した作業療法士は言った。最初、その言葉の意味がわからなかったが、ふと、病院見学を経てわたしはこう考えられるようになった。老人がしていた箸を使ったリハビリは日常生活を支援なく送るうえで重要だったけれど、元板前の老人にとって食生活に関わるリハビリはそれ以上の意味を持っている。これは老人が「日常」を取り戻そうとする意欲につながるのだらう。あの作業療法士は生活の中の基本的な動作を回復させることも、老人の日常にあった記憶を呼び覚ますこととしていたのではないだろうか。「患者のやりたいこと」とは患者が唐突に失ってしまった「日常」を思い出させるような作業であり、それを支援するのも作業療法士にとっての治療だとわたしは考えた。「お前もやってみろ」というあの言葉から荒っぽさが消えた。この瞬間、わたしの漠然とした関心は、はっきりとした目標に変わった。

最優秀賞

聲の衰退

県立瀬谷西高等学校 三年

鈴木 楓

「本当はね……。」
いつから私達は本当の気持ちを声に出して伝えることを、面倒だと思ってしまうようになってしまったのでしょうか。今、LINE等のSNSが普及しているこの平成という時代に、直接会話を交わす機会は昔に比べると格段に減ってしまいました。確かにLINEは便利ですが、手軽にコミュニケーションがとれて、相手が近くになくても意思疎通ができます。でも、それだけでよいのでしょうか。相手がどんな表情で、声のトーンで、速さで伝えたいのかは少しも相手に伝わりません。それは本末転倒だとは思いませんか。声は、文字と違って発してしまえば消えてしまう儂いものですが、時には文字よりも人の心に残りやすいと思います。
実は、高校最後の今年の夏休みに、聲の大切さを思い知らされたのです。それは、八月も終わりに差し掛かる頃、特別養護老人ホームという、要介護度の平均が四から五の人が集まる施設に行きました。最初は老人ホームなんてと、あまり良いイメージをもっていなかった私ですが、施設の中はたくさんの方々の笑顔と声で溢れていました。二日間あるうちの一日目は、お話をしました。高齢の方とあまり接する機会がなかった私は、戸惑ってばかりいました。そんな時、施設の方が見回りに来て、おばあさんと会話をしているところを見て、目をしっかりと合わせて、手などを握りながらいつもの二倍の音量で、速さにも目を合わせて、話を拾ってくださるからこそ楽しそうに話すと、少し泣きながら一生懸命声を出し、「面白かった。」
二日目は納涼祭というお祭りでした。友達と浴衣を着て参加しました。納涼祭で一緒に回るようになったのは、車イスに乗った優しいおじいさんでした。体が不自由で、耳も少し聞こえづらく、声をだしくそうでした。十六時から始まったお祭りが終わり、私が感想を尋ねると、「面白かった。」
「面白かった。」
と言ってくれました。文字にしたらたったの五文字ですが、その言葉の中にたくさんのお思いが込められていることがわかり、泣きそうになりました。声自体は消えても、今でもその時の情景や表情が鮮明に思い出せます。この体験を通して、人間は会話をすることで誰かとつながり、生きていくということを実感することができました。
この豊かな時代で、減っている会話を、子供の頃は、言葉を探しながら一生懸命に話をしようとしていたはずなのに、今では恥じらいや、ためらいばかりが増えようと思いませんか。少しでも自分から胸の内を明かすこと、気持ちを理解しよう、してもらおうと思うだけで、身の周りの世界は変わるのです。だから私は言いたい。恥ずかしがらずに声を大にして。
「本当はね…君ともっと話がしたい。」と。